



手工芸品生産工房における女性と仕事の民族誌ーバングラデシュの首都ダカにおけるカジの実践と場に着目して

鈴木, 亜望

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2021-03-25

(Date of Publication)

2023-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第7956号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007956>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



(別紙様式 3)

論文要旨

氏 名 鈴木亜望
専 攻 文化相関
指導教員氏名 齋藤剛 教授

論文題目 (外国語の場合は日本語訳を併記すること)

手工芸品生産工房における女性と仕事の民族誌

——バングラデシュの首都ダカにおけるカジの実践と場に着目して

論文要旨

本論文では、バングラデシュの首都ダカにあるシルクスカーフ生産工房を対象に、工房でのオーナー、コルムチャリ（従業員）、カジルメエ（家事に従事する少女）の視座から、それぞれがいかなる仕事を行い、工房の空間をいかに解釈し、工房内外の関係をいかに構築しているかを明らかにしている。それにより、開発研究やフェミニストによる、ジェンダー規範が生み出す男性への経済的社会的依存を問題視し、賃金労働によって農村貧困女性を救済するといった一面的な関係で捉えられていた女性の仕事の間や実践を再考してきた。

女性の仕事に関する先行研究の問題点は、開発研究やフェミニストがバルダ（女性隔離の慣習）を特に農村の既婚ムスリム女性たちの行動原理としており、歴史的な変化や女性たち自身の見方に対する検討が不十分だったことである。近年の急激な都市化と輸出向け縫製工場への若い未婚の女性たちの労働参入により、女性の仕事をめぐる状況は変化している。そのため、女性の仕事に関わる家父長制とバルダと呼ばれる女性隔離の習慣などの伝統的なジェンダー規範と、近代化を目指す開発支援の言説に付随するジェンダー平等のイデオロギーとを対立的なものとして、現実を十分に理解することができない。この問題を検討するために、本論文では既婚女性たちが伝統的に仕事をしてきた家と新たな労働の間や実践との中間的な要素をもつ場所として、ダカのシルクスカーフ工房を対象に、工房で働く女性たちの視座を提示している。

バングラデシュで農村においてバリを中心に活動してきた女性たちが、都市へと移住し、縫製工場のような場所で労働するようになったことで、現実的な問題として新たな従属の関係が生じてきたのである。女性の都市への移動と就労により、従来のジェンダー規範のみならず、バングラデシュを覆うようになった開発経済システムの中で、縫製工場などで新規に労働に参入した女性たちが経済的下位層に位置付けられるようになったことである。つまり、女性は二つの従属的な関係の間に位置付けられることになったのである。伝統的なジェンダー規範と近代的な工業化との関係においては、現金収入を獲得するためにはバルダという従属的なジェンダー関係を回避しなければならない。他方、縫製工場への労働者としての参入することは、グローバル経済における低賃金労働者となることを意味し、かつバングラデシュの中でのエリートに搾取される存在として、労働に従事する女性が位置づけられる。すなわち、彼女たちは、グローバル経済と国内経済における従属関係に埋め込まれているといえよう。

これらの二重の従属的な関係を回避する場として手工芸品生産工房が「アジュール」であるという仮定のもとに、彼女たちの視点から仕事の間や実践を検討する解釈的なアプローチをとりつつ、工

房をめぐる民族誌的事例を提示しつつ、その分析をしている。

第1章では、バングラデシュにおける手工芸品生産の展開を述べる。バングラデシュにおける手工芸品生産の位置づけを、ベンガルにおける工業化の発展が途絶されたこと、女性の賃金労働の間や実践の変化、女性たちとの関係といった諸点から見定める。

第2章では、バングラデシュを取り巻いてきた開発援助の実態が、現地社会でいかに機能しているのかを明らかにするために、工房をめぐる支援の実態を描く。特に工房が取引を行う海外支援者がフェアトレード団体であるという点に着目し、フェアトレードという名の開発援助と工房との関係を明らかにする。フェアトレード商品の受注は、フェアトレード規格に沿った商品生産を意味し、とりもおさずフェアトレードという名の経済的な枠組みに取り込まれることとなる。実際、フェアトレードの流通システムの末端に工房は位置づけられており、支援の対象とみなされている。しかし、生産者として位置づけられているにも関わらず、工房において活動する女性たちの実態やフェアトレードに対する理解のあり方は、これまでのフェアトレード研究などにおいては等閑に付されてきた。

第3章では、工房の人々が開発援助によって生じた手工芸品生産をどのようにとらえているのかを、サハッジョという支援をめぐるローカルな概念を手がかりとして、当事者の視点から明らかにしていく。フェアトレードに関わることは、フェアトレードにおいて是とされる価値観や評価基準を受容することをも意味する。しかし、サハッジョに着目することは、当事者たる女性たちがフェアトレードの理論を自分たちなりに改変し、流用している様子を浮かび上がらせてくれる。工房に関わる女性の視点からフェアトレードなる新たな開発援助の問題点を明らかにすることも本章の目的の一つとなる。

第4章では、開発研究で見過ごされてきた現地の人々の視座に焦点を当て、オーナー女性が工房での仕事をいかにとらえ、なぜ仕事をし、なぜ「外国人」のサハッジョを好むのかを家との関係から検討する。彼女の人生において、工房での仕事に対して、家族を養い、コルムチャリを養うために有効な手段としてあったことを示す一方で、彼女のオーナーとしての活躍や、仕事をなんとしてでも続けようとするのに対し、夫が不満を抱いていた。両者の間の葛藤は、夫と妻の相互のケアに関するすれ違い、夫は妻が外出することと性的な奔放さにとらえることなどから生じていた。これらの事例から、それぞれの仕事をするののとらえかたの違いを検討する。

第5章では、オーナーの下で働くコルムチャリ（従業員）たちを対象に、彼女たちによる仕事の選択、意味づけ、交渉の語りから、行動の地理的な範囲と賃金労働を行うことをめぐる分析を行い、彼女たちにとっての仕事の空間とはいかなるものかを議論する。男性の活動領域とされた現金獲得を女性たちが行うことに対して、家族や親族から同意や反発などの様々な反応がある中で、彼女たちは工房での仕事を世帯の経済の延長にとらえることで葛藤を調整する場であることを議論する。

第6章では、工房と接続するオーナー家族の家において、家事使用人として働くカジルメエの家と工房との関係と仕事に関して検討する。カジルメエたちは、家族のような関係として家において住み込みで働いている。しかし、カジルメエにとって家というメタファー（家と女性の結びつき、行動範囲の制御、家の安全性）が、オーナー女性やコルムチャリとは異なり社会からの排除として作用しているという問題を検討する。

第7章では、現地の手工芸品生産団体であるアーロンとの定期的な商取引のはじまりにより、生産関係が工房の内部および外部で変化した事例を示す。工房で恒常的にローカル NGO との取引が始まり、勤務時間が長時間化し、オーナー女性からコルムチャリに対して仕事の圧力を加える中で、オーナーとコルムチャリたちの関係がいかに変化していったのかを検討する。

これらの議論により、工房が二重の従属性を回避する可能性と限界を示す。

【課程博士用】

論文審査の結果の要旨

氏 名	鈴木 亜望		
論 文 題 目	手工芸品生産工房における女性と仕事の民族誌ーバングラデシュの首都ダカにおけるカジの実践と場に着目して		
判 定	合 格 ・ 不 合 格		
論文チェックソフトによる確認	☒ 確認 ☐ 未確認 理由：		
審 査 委 員	区 分	職 名	氏 名
	委 員 長	教授	岡田 浩樹
	委 員	教授	梅屋 深
	委 員	教授	齋藤 剛
	委 員	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・教授	外川 昌彦
	委 員		印
要 旨			
本論文は、バングラデシュの首都ダカにある、フェアトレードと関係したローカルな手工芸品生産工房で働く女性と、彼女たちの仕事、そして仕事の場をめぐる人類学的研究である。バングラデシュにおいては、開発支援やフェアトレードが浸透しているだけでなく、1990年代以降縫製産業が台頭しているが、そのような社会的・経済的状況を視野に収めつつ、本論文は、フェアトレードとグローバル経済の末端に位置づけられる手工芸品生産工房を対象として、女性が働くことの意味を詳細に論じた民族誌として構成されている。序論と結論を含めて全9章からなる本論文においては、一貫して工房に着目しつつ、多角的な議論が展開されている。その主だった論点としては、バングラデシュおよび都市ダカの社会的・経済的・歴史的展開、開発支援の一環と位置づけられるフェアトレードと工房の関係、支援に関わるサハジヨというローカルな概念の検討、工房の女性オーナー、従業員、家事使用人の間の関係と彼女たちの支援の理解、工房での仕事の実態、ローカルなNGOとの新たな取引の開始に伴う工房の変化などが挙げられる。 ベンガル語による通算で約26ヶ月（2013 年10 月から2015 年8月、2016 年8月、2017 年2月、2020 年1			

月から3月）に及び現地調査を通じて得た詳細な一次資料と、多数の文献資料を十分に用いて本論文は構成されている。また、既存の文化人類学的研究がバングラデシュ農村部を主たる調査地としてきたのに対して、都市への女性の流入と就労という比較的新しい現象に着目している点に本論文の特色の一つはあり、審査委員会においても高く評価された。さらに、本論文は、現地の女性を対象としてきた開発支援、開発研究、ジェンダー研究などにおける女性をめぐる言説の問題点を明らかにすると同時に、既存の研究や開発実践、フェアトレードにおいて等閑に付されてきた工房で働く女性達に光をあて、現地調査を基にして、今日の女性にとっての仕事の意味、ジェンダー規範のあり方、都市における生活と新たな社会関係の編成の特質を問うている点においても、重要な学術的貢献を果たしている。本論文は、現代のバングラデシュにおける女性と仕事をめぐる議論に新たな視点を提示しようとする意欲的な試みであり、文化人類学、開発の人類学、南アジア地域研究などに寄与する高い学術的価値を持った研究である。

本論文が第一に着目するのは、開発支援が深く浸透しているという社会的・経済的趨勢の中で、農村部の女性が開発実践者などにより支援の対象として把握されている点である。バングラデシュ農村部では屋敷地に女性を隔離するバルダという慣習がみられるが、開発実践者はバルダを、女性を抑圧する「悪習」と捉えたうえで、女性の社会進出と経済的自律の実現に向けた支援が、抑圧状況からの女性解放に繋がると捉えた。これに対して学位請求者は、開発支援を必要とする存在として女性を一枚岩的に表象することが、彼女たちを開発支援というコンテキストにおいて従属的な存在に位置づけるのみならず、バルダという慣習を生きる女性の多様性と生活実態を捨象しており、現実と乖離したものであったと論じている。

他方で、学位請求者は、1990年代に入ってから、輸出用縫製産業が国家経済を支える一大基幹産業へと発展した結果、地方農村に暮らす女性が都市に流入し、非熟練労働者として縫製工場で就労するに至った点に着目している。縫製産業の台頭は、女性の社会進出と経済的自律の実現を可能にしたといえるが、女性たちをグローバル経済に組み込むという新たな従属性を生みだすものでもあった。

本論文は、開発支援とグローバル経済の浸透が進むバングラデシュにおいて、女性たちがこの「二重の従属性」という状況をどのように受け止めつつ、自らの生活の場を作り出しているのかを、工房に着目して論じている。そして、この工房の特質を浮き彫りにすべく、「アジール」概念を批判的に検討したうえで、これを分析概念として用いた独自の議論が展開されている。

質疑応答は、2時間にわたって行われ、バルダをイスラームにおけるヴェール論と広く関連づけた議論の展開可能性、南アジアの脱植民地化とナショナリズムにおける手工芸品の歴史的意義についての理解などがまず問われた。これらについては、論文の中でも部分的に論じられているものではあるが、さらに視野を拡大して、丁寧な議論を展開する必要がある。また、サハジヨという民俗概念に着目することの妥当性、現地における女性の捉え方、労働と女性の関係などについても質問が提示された。現地における女性、労働、支援の捉え方を問うこれらの質問に対して、学位請求者からは、詳細な一次資料の内容を基にした回答が提示された。最後に、分析概念として提示されたアジールについて、集中的にその問題点が指摘されたが、学位請求者は分析概念のさらなる精練の余地について自覚的であるだけでなく、家事使用人の事例を通じて工房に関わる女性の関係の力学を本論の中で詳細に論ずるなど、オリジナルな議論と民族誌的資料の収集・提示を行なっている。本論文は、バングラデシュにおける新たな社会的・経済的動向を踏まえつつ、工場や家とは異なる工房という場に着目して、民族誌として厚みのある資料を収集、提示し、女性と仕事について独自の議論を構築した学術的価値の高いものであると審査委員会は高く評価した。学位請求者である鈴木亜望氏への学位授与がふさわしいとの結論に、審査委員会は全員一致で達した。